

# 東海山本源禪寺

興国元年（一三四〇）南北朝の頃、夢窓国師の発起に依り足利尊氏が国家安全を祈願して、属国六十六ヶ所、島二ヶ所に安国寺を造営する。当寺は、旧西々条郡神戸村（現津山市神戸）に創建された美作国安国寺の後身で、開基は足利尊氏、開山は不明である。創建当初は臨済宗の五山派であったと思われる。現在の場所に移されたのは、慶長十二（一六〇七）年で、中興開基は、津山藩初代藩主森忠政公である。現在は臨済宗妙心寺派の禅寺である。

森忠政公は、清和源氏八幡太郎義家の後裔で、織田信長の忠臣美濃兼山城主森可成の六男として、元龜元年（一五七〇）に兼山で生まれる。しかし、忠政公誕生と同年の四月に信長の朝倉攻めに際し、越前国手筒山にて長男可隆（十九歳）が、九月には浅井、朝倉軍に敗れ父可成（四十八歳）が相次いで戦死した為、次兄長可が森家の家督を継ぐ。天正十年（一五八二）本能寺の変で織田信長と共に、三男乱丸（十八歳）、四男坊丸（十七歳）、五男力丸（十六歳）が戦死する。信長の死後、森長可は池田恒興と共に羽柴秀吉に付くが、天正十二年、長久手の合戦で長可（廿七歳）が戦死し、六男の忠政公が十五歳にして父と五人の兄を亡くし兼山城主となり家督を継ぐ事となる。

秀吉に仕え信頼を得た忠政公は、羽柴の姓を賜る。秀吉亡き後、徳川家康の信頼を得て、慶長五年（一六〇〇）に美濃兼山七万石から、次兄長可の旧領（信長が武田家を滅ぼした時の、褒美として長可に与えられた地）信濃川中島の埴科、更級、高井、水内四郡十三万七千五百石に封ぜられた。そして、関が原の功績により慶長八年（一六〇三）二月六日、家康が将軍となる六日前、三十四歳の時に美作一国十八万六千五百石を徳川秀忠より拝領する。

忠政公は美作国主として入封、ひとまず院庄の旧美作守護所近くに居を構え、また近くの安国寺を森家菩提所と定める。一年かけて城地の選定をし、翌九年に鶴山に築城を開始する、と同時に安国寺を小田中村に移し、海晏禅師を迎えて「萬松山安国寺」中興の祖とした。

三年後の慶長十二年に、安国寺を西今町の北（現在地）に移し「萬松山龍雲寺」と改号する。海晏禅師筆の龍雲寺本堂棟札に「慶長十二年十一月、津山城主羽柴忠政公が城より西へ數十町の処に龍雲禪寺を草創」とあるように、城の真西にあたる現在地に移した。忠政公は慶長九年に鶴山を「津山」と改めており、この棟札が津山という地名使用最古の例とされている。

江戸幕府が開かれたとはいえ大坂の陣の前でもあり、戦国の熱さめやらぬこの時期、より戦を念頭に置いた城と城下町造りが始まる。津山城は五層の天守を始め、七十七を数える櫓、四十近い城門など百数十の建築物がひしめく壮麗な城で、十二年かけて完成した。

城下の町造りも防衛上の理由から、寺院を城の東西に集中させ寺町を形成した。18世紀初頭には、城の西に二十四ヶ寺、東に十ヶ寺と城西に寺院が多く、また津山城の天守も西を見渡せるように建っており、城下防衛は西側に重点が置かれていた。龍雲寺の広大な境内は、城下の西側の重要な防衛拠点ともなっており、堅固な中門の両脇には、石垣と武者走りの跡が現在も残る。

寛永十一年（一六三四）七月七日に京都で忠政公は急逝し（六十五歳）、船岡山の麓で火葬後、大徳寺三玄院（一五八九年に、石田三成、浅野幸長、森忠政公の三人が建立）に葬られた。

忠政公の突然の死は美作の人々に大きな衝撃を与えた。この日は七夕祭りに当たるため、美作ではこの忌日をさけて七夕祭りをを行うようになったと伝えられている。「桃」の食害で？亡くなられたとも言われており、当山では忠政公に桃はお供えしないという事になっている。